仕事が楽しい人Ｆｉｌｅ．６９：矢野里枝さん（ラーニングデザイナー）

◆学びは、プログラムだけではなく場の設定で、質が劇的に変わる

第６８番目の仕事が楽しい人は、ラーニングデザイナーの
矢野里枝さんです。

ラーニングデザイナーとは、学習者のニーズにあった教育プログラムを設計するだけではなく学びの場までつくる、矢野さんが独自に命名した職業名です。
学びの場とは、シニア、主婦、子どもという世代・性別を超えた人たちが、自然に交われるところ。
多世代が学べる、地域に根差した場を作るとう志を矢野さんは掲げ、一般社団法人ソシオスタイルを設立しました。
学びの場を設ける必要性を矢野さんは、私の世代（５０歳代）を対象とした研修の実施事例を基に話してくれました。
50 歳の半ばを過ぎると、大半の人たちは定年を意識しだします。
ですが、ただ、何も手を打たないまま漫然と会社に通い続け定年を迎えても、何をしていいのかさっぱり見当がつかない。
こうなる人が多いのだそうです。
そうならないために、矢野さんは研修で、
・これまでの仕事の経歴（ライフキャリアチャート、職務経歴）を整理させて、自分の強みを炙り出す
・自分の強みを理解したうえで、定年後のやりたい仕事を考える
ことを受講生に促しています。
定年後のキャリアを描けないのは、役職に胡坐をかいてきたような人。
再就職の面接で、

「あなたは、何ができるのですか？自己ＰＲもかねてご説明ください」
と、面接官から尋ねられて、
「私は、部長ができます」
と、答えるような人は、受け入れ企業がなかなか見つからないようです。
そこで、
・ある年齢に達しても、市場価値が高いと認められる人とは
という問いに答える形式で、充実したセカンドキャリアを迎える方向付けをします。
市場価値の高い人の特徴として、
・フットワークが軽い
・多くの人脈を有している
・新しいスキルを身につけるスキルがある
が、上げられます。
このような流れで、矢野さんは、定年後のキャリアについて設計する研修を行い、多くの受講生から、
「いい勉強になった」
との感想をもらえているのですが、
中には、
「このような研修を行うのは、会社がリストラの準備を進めているからなのだろう」
と、人事にクレームを言ってくる人もいるそうです。
シニア層の再就職は極めて厳しく、会社から放り出されたら大変なことになるとの恐怖心からの物言いだと理解できるので、こういう人こそ、定年後のあり方を早くから準備してもらいたいと、矢野さんは言います。

さて、このキャリア研修の事例から、学びの場を設ける必要性をどのように説明できるのか考えてみましょう。
そもそも仕事とは、
ある人の困りごとや面倒ごとを、ある人が成り代わって行うこと
と定義づけられます。
例えば、
・子どもが病気で保育園に連れていけず、しかも仕事を休めなくて困っている夫婦には、“子どもの預かり”
・忙しくて掃除する時間も取れないとぼやいている人には、“掃除ロボット”
・旅行に行きたいが、宿や飛行機の予約が面倒な人には、“旅行代理”
というように。

このように整理してみると、矢野さんが、ラーニングデザイナーとして、学びの場、すなわち、地域で多世代と交わる場を設けたいと考える趣旨が理解できます。
それは、人の困りごとや面倒ごとは身近に溢れていて、そこから、自分にできることはなんだろうと考えると、色々なお助けごとが、具体的に浮かんでくるからです。

学びは、プログラムだけではなく場の設定で、質が劇的に変わる。

矢野さんを取材していて、
「事件は会議室で起きてるんじゃない 現場で起きてるんだ」
という、有名なドラマの名言を思いだしました。

◆矢野さんが大切にするキーワード
焼きあがったケーキを配るのではなく、キッチンに仲間を招き入れよう
　自分がやりたいことをこと細かに設計して、その結論に誘導するがごとく仲間と打ち合わせするのではなく、みんなでアイディアをまっさらな状態から自由に出し合い、そこから結論を導き出すリーダーシップスタイルを取りたいと思っています。

◆矢野さんのパワー○○
保護犬
　わけありの犬を預かりきちんとしつけると２カ月間で、お座り、待て、伏せができるようになります。
　その後、里親が無事に見つかり引き取られると、ホッとします。

◆矢野さんのコツコツ
月間２冊の読書を１０年間継続
　参考になった内容をまとめてパソコンに保存しています。
　たくさんの優良コンテツが蓄積され、自身のアイディアの源泉になっています。

◆大ごとではなく、自然ごととして捉える

矢野さんは、保護犬と児童養護施設に関連したボランティアをしています。
　保護犬とは、多頭飼育崩壊（飼っている犬が増えすぎて面倒見切れなくなってしまうこと）して、
　保健所に引き渡された犬を一時的に保護すること。

矢野さんは、動物好きで、犬も猫も飼っていますが、保護犬も継続的に預かり、きちんとしつけをした上で、里親に犬を引き取ってもらっています。
調べてみると、日本では、毎年１０万頭の犬が保護され、そのうち８万頭が殺処分されているようです。

「犬は、２ヶ月あれば、“お座り”“伏せ”“待て”の基本を覚え、里親が喜んで引き取ってくれるので、しつけの大切さをあらためて実感できるんですよね」
と、矢野さんは、犬は可愛いですよという眼差しを注ぎながら、私に説明してくれます。

また、児童養護施設では、子どもの自立支援をしています。

支援をしている子どもは、
複雑な家庭環境に身を置いていた影響から大人を信用しなくなっているので、
面談しても、目を合わせてくれない。
話すきっかけを作ろうと、カードに質問事項を書いて持っていくと、
そのカードを奪うように手に取り、質問の解答をカードに直に書き込み、
「はい、これでいいでしょう」という仕草で、無言でカードを突き返してくる。
そこで、カードを覗き込み、「何を書いているの」と近づくと、
ランドセルがつい立になるように、“ボン！”と机の上に置き、
「気持ち悪いから、離れて」
と、拒否反応を露わにしてきます。

この子どもとのシビアなやり取りを、矢野さんは、私に、
楽しそうに、笑顔で話すのです。

「子どもから気持ち悪いって言われたので、そんな言い方ないんじゃないって、思わず言っちゃいました」
（ニコニコ）
という感じで。

保護犬の一時預かりも、子どもの自立支援も、
言うは易く行うは難し。
私の様な常人には、おいそれと行えるボランティアではありません。
にもかかわらず、
「こんなに楽しいことはないですよ」
との思いに溢れたにこやかな表情で、矢野さんは話します。

保護犬についても、児童養護施設の子どもについても、保護者の勝手から発生している不条理極まりない、胸がつまる出来事なのですが、矢野さんから、このような雰囲気が伝わってこないのです。

なぜなんだろうかと、その理由を考えに考え抜いてみて、
矢野さんは、これらの現実を、大ごとではなく、自然ごととして捉えているから
底抜けの笑顔で対応できているのだという結論にいたりました。

「これは大変だ（大ごとだ）」と捉えると、動きが重たくなりますが、

「こういうこともあるわよ（自然ごと）」と捉えると、動きが軽やかになる。
良いも悪いも、全てひっくるめて、世の中なんだから、大ごとと捉えて、喧々諤々している暇があるなら、
自分にできることにさっさと取りかかればいい。
こんなメッセージが、矢野さんの笑顔に隠れている気がしました。

◆矢野さんのプロフィール
職業：ラーニングデザイナー
所属：一般社団法人ソシオスタイル（http://socio-style.jp/）

◆ラーニングデザイナーとは？
（13 歳からのハローワーク公式サイトから抜粋しました：社会教育主事から引用）
都道府県および市町村の教育委員会で、社会教育を担当する専門的職員。生涯教育や青少年教育、家庭教育といった学校教育以外で行われる社会教育を促進するために、地域住民のニーズに合った講座などを企画・実施する。また、専門的知識や経験に基づいて、公民館や生涯学習センターなどの施設の運営指導や、関係職員に対する助言も行う。さらに、地域で活動している青少年団体、婦人団体、PTA などの社会教育団体に対し、支援や育成を行うのも社会教育主事の業務に含まれる。最近は、公民館などで開催されるパソコン教室やダンス教室に人気が集まるなど、生涯学習への関心が高まっている。しかも人々の学習ニーズは多様化しており、社会教育の分野においても情報化・国際化の流れを取り入れる必要がある。地域社会に住む人々の学習ニーズを敏感にキャッチし、その意欲に応える社会教育主事の仕事は、地域の活性化にも貢献しているといえる。

◆ラーニングデザイナーに求められる能力
使命感：不条理から目を背けない力
自然ごと力：自分でできることを見つけ、さっさと取り組む姿勢
現状分析力：教育支援対象者の課題や特性を把握する力
プログラム設計力：最適な教育プログラムを立案する力
笑顔力：教育対象者を温かく包み込む力